

# 埼玉県障害者スポーツ協会との共同開催による障がい者登山支援

高 橋 努（公益社団法人日本山岳会埼玉支部）

## 1. はじめに

4月7日晴天の下、まさに100%満開となった桜花が咲き誇っている。障がい者もご家族も障害者スポーツ関係者も、そして日本山岳会会員も皆が花に酔いしれ、幸せな気分になっている。埼玉県入間市街から続く加治丘陵の桜山展望台山頂にそれぞれお弁当を広げ、もう仲間としておかずを分け合ったり、デザートのお菓子を配ったり、まさにふれあいが広がっている。花の季節と温もりのある晴天がその背中を優しく押してくれた。私たち公益社団法人日本山岳会埼玉支部では、こんな活動を「ふれあい登山」と称して12年間に渡って取り組んできた。

久保さんは埼玉県障害者スポーツ協会（以下、協会）の副会長を務められており、大久保さんのアイデアとリーダーシップで、すぐに障がい者との「ふれあい登山」構想が示され、協会と連携しながら着々と準備が進んだ。ちなみに一昨年は東京パラリンピックが開催され、多くの競技をテレビで観戦し、驚いたり、感動したりしたが、大久保さんは2008年の北京パラリンピックの団長（初の女性団長）を務められた。選手団の先頭で大旗を振りながら行進する姿はご立派だった。ここにふれあい登山のルートがあると感じる。

（北京パラリンピックの参加選手数は163名、メダル数は27個、東京パラは選手数254名、メダル数51個）



第一回ふれあい登山は、2011年4月飯能市近郊の日和田山を舞台に、19名の障がい者、ご家族、そして23名の日本山岳会埼玉支部会員、総勢63名で開催された。日本山岳会会員は全員が障がい者との登山経験はゼロで

## 2. 「ふれあい登山」の経緯と実績

埼玉支部は、2010年4月日本山岳会の30番目の支部として設立された。設立と同時に山行委員会、安全登山委員会、自然保護委員会などと併せて社会貢献委員会が発足し、故大久保春美さん（元埼玉支部長、日本山岳会副会長）が委員長に就任された。大

ある。大久保さんから事前に障がい者の方たちとのコミュニケーションに関して若干のレクチャーを受けてはいたものの、出発時はかなり緊張した。しかし、大久保さんの「余計な気遣いはしないで普段通りでいいのよ」の一言で、ワンピッチを歩く間にすぐに緊張感は解けた。引率し、教えなければという姿勢から「ともに楽しもう」という気持ちに変わった

## 1. 登山に関する調査研究

のだ。まさに「ふれあい」効果であろう。一方で私達にとって日和田山はほんの散歩気分で歩けるコースだが、障がい者の皆さんにとっては結構なチャレンジだということにも気づいた。なんでもない場所でもチャレンジがあり、頑張りどころなのである。解散後の日本山岳会会員の打ち上げは大いに盛り上がり、毎年やりましょうという熱い想いを共有した。大久保さんの嬉しそうな笑顔が忘れられない。

以来、毎年この季節（2020年度と2021年度はコロナ影響で秋開催）に埼玉近郊のハイキングコースで開催し12回を重ねたが、年によっては120名を超える多人数のこともあり、一般ハイカーにも「どういう団体ですか」と関心を呼んだ。少し急な下りにはプロガイドの支部会員によってフィックスロープを設置する、医師の会員がAEDを担いで備えるなど、安全、事故防止には最善の注意を払ってきたが、お陰様で今まで無事故である。

2018年1月に思いがけず大久保さんのご逝去に接し、大きな悲しみに襲われた。1周忌の墓前で協会事務局長から「大久保春美記念ふれあい登山」としたいとのご提案があり一同大いに感激した。お聞きすると協会内でも大久保春美ファンが多く、ペットネーム「ハルミン」というオレンジ色の花の縫ぐるみを作り大事にしているとのこと。大久保さんはどこでもこんなに慕われていたのだ。

私達はこのふれあい登山をボランティア活動とは思っていない。障がい者とのふれあ

い登山を心から楽しみ、むしろ私たちの方が学ぶことも多い素晴らしいイベントだと捉えている。だから皆がこの日を楽しみにしている。「ようやく皆さんも分かってきたわね」天から大久保さんの声が聞こえるようである。



やはり下りが怖い、慎重に、慎重に下る。

### ふれあい登山の参加者数実績

回数	年度	目的地	参加者合計	障がい者	付添	日本山岳会関係者	協会その他
1	2011春	日和田山・物見山	63	19	15	23	6
2	2012春	鐘撞堂山	56	11	13	29	3
3	2013春	官の倉山	80	28	24	26	2
4	2014春	仙元山	126	48	45	30	2
5	2015春	宝登山	115	43	37	34	1
6	2016春	大高取山	56	12	11	28	5
7	2017春	天覧山・多峯主山	91	25	26	31	9
8	2018春	弓立山	74	21	21	28	4
9	2019春	加治丘陵	76	21	19	31	5
10	2020秋	あさひ山展望公園	69	20	17	27	5
11	2021秋	日和田山	62	17	14	27	4
12	2022春	鐘撞堂山	66	17	13	32	4
平均			78	24	21	29	4

障がい者の障がい別占率=身体障がい12%、知的障がい80%、精神障がい8%

### 3. 成果と課題

協会は、屋内、屋外を問わず様々な障がい者スポーツを担っており、埼玉県下の多くの障がい者が施設を利用し、スポーツを楽しみ、競技に打ち込んでおられる。

スポーツの種目は多彩であり、一方で個々の障がい者を取り巻く環境も多様である。しかし、協会の職員数は限られており、また、春秋には全国の競技大会が開催され、4年に1回はパラリンピックも開催される。従って、協会業務は多忙を極め、新しい分野に対する取り組みは限られる。しかし、障がい者も多様であるので野外でのハイキングなどを希望する声も多い。しかし協会としては、山道は危険も多く、天気への対応や目を配りにくい面も多いので取り組みにくいスポーツである。

障がい者の家族にとっても野外での活動を経験させたいという希望はあっても、登山経験も不十分だとどの山なら安全に楽しめるのか全く分からない。

従って、障がい者、付添家族、協会にとって山岳会のサポートは極めて有効で期待される場所なのである。

私達、日本山岳会会員にとっては、障がい者のハイキングのサポートはしてみたいものの、実際には、個人レベルではその機会は得にくい。従って、「ふれあい登山」は3者にとってニーズの一致する取り組みなのである。回を重ねるたびに新たな発見や課題も見つかったり、参加する障がい者の方の成長ぶりに驚かされたり、また、日本山岳会の会員も世代交代が進み、新しい入会の若い会員も企画運営やサポートに参加されるようになって、新しい時代に移行しつつある。

今後の課題：

- ① 安全に楽しめる近郊のハイキングコースには限りがあり、第11回からは以前実施したハイキン

グコースを利用しているが、新しいコースの選択が求められている。しかし、ファミリー向けのハイキングコースでも小さな岩場があったりして選択に迷う。

- ② 参加する障がい者の方々の中には、足の強い方もおられ「やや、物足りない」の声もある。初級ばかりでなく、中級コースのクラスの新設も求められている。年2回（春と秋）の実施も検討課題である。
- ③ 日本山岳会のサポートメンバーには、危険個所のサポート、レスキュー（場合によっては背負って降りる等）、AEDを備えた医師、障がい者とのコミュニケーションスキル（筆談など）を有する者等が必要とされる。サポートメンバーの世代交代の中でこれらの人材の確保が必須である。
- ④ 幸いこれまでは事故なく実施できたが、万一の場合の対応について、引き続き万全の準備と対応体制の構築が必要である。
- ⑤ 2020年からコロナ禍の中での開催となり、コースの選定、事前の健康チェック、行動中の配慮、諸備品の準備等々、様々な工夫を迫られた。今後もこのような事態に対してどのように対応をしていくかを備えておかねばならない。
- ⑥ 日本山岳会として、かかる活動に取り組んでいる支部などがあるのでノウハウを蓄積して全国的な活動としての展開に取り組まなければならない。
- ⑦ これまでは、協会と日本山岳会埼玉支部がそれぞれの特徴を活かして役割の分担をし、円滑な運営を果たしてきたが、今後、更に連携を深め、安全で安心して楽しめる「ふれあい登山」を継続して運営していかなければならない。

### 4. 終わりに

12回「ふれあい登山」を実施してきて、強く感じるのは、障がい者を支援するボランティア活動という意識の払拭である。登山というスポーツは老若男女だれにも楽しめる親しみやすいスポーツである。しかし、警察の遭難統計などによれば、他のスポーツに対して格段に事故の多い、危険の高いスポーツでもある。人間は本質的に自然の中でびのびと体を動かすことに快感を感じる動物であろう。このような本質的な楽しみのニーズを享受することは権利である。そして、その楽しみを共有することは障がいの有無にかかわらず誰にとっても嬉しいことであるはずである。

そんな基本的なことに素直に取り組んでいくことが長く継続する要諦になるのではないかと考えている。

引き続き「参加者が共に楽しむ」をキーワードにして継続していきたい。



マスコットの「ハルミン」